

第十一回 AJフォーラム（研究会）

お茶は平民と女を救うか ——非西欧的・非政治的パブリック圏としての茶道

日程：2007年10月20日(土)

場所：国士舘大学世田谷校舎 中央図書館AVホール

講師：加藤恵津子（国際基督教大学国際関係学科准教授）

本日は、茶道という非西洋の一角で起こった一芸道を通時的に見て、ハーバマスの主張とは異なるパブリック圏、つまり必ずしも政治的变化を生まないパブリック圏もあるということ、そしてその種のパブリック圏にも独自の意義があることを、江戸時代と現代においてどのような社会グループが茶道に携わってきたかに着目することを通して、論じたいと思います。

1. ハーバマスとその周辺

まずは、私なりにハーバマスの「パブリック圏」の議論についてまとめてみました。彼は、17世紀半ばから18世紀後半にかけてのヨーロッパでは、国家権力とは別のコミュニケーション圏域として、イギリスのコーヒーハウスやフランスのサロンに代表されるブルジョワ的パブリック圏域が徐々に形成されたと言っています。経済的・時間的余裕と教養があった彼らは、文学や音楽などを批評していく中で、オープンな討論が奨励されるような社会的素地を生み出していきます。それがやがて国王や教会などの権力に対する政治的批判も行われる場になり、近代デモクラシーを生んだ、と議論しています。

ハーバマスが論じたパブリック圏の特徴はいくつかあります。たとえば対等性の作法というもの。これは、議論の場ではメンバーの社会的な地位が一時的に無効になることです。また、それまで当然視されていた領域が問題化されました。つまり、それまで宮廷や教会が大きな権力を持っていた哲学や芸術の解釈において、それを批判し、論議するようになったのです。また、ブルジョワ的パブリック圏は、ある程度のお金と教養さえあれば誰でも出入り自由だったため、参加者は自分たちが特別な人間であるとは捉えず、ハーバマスの言い方をしますと「ザ・パブリック」の代表者、あるいは代弁者と自分たちを理解していたのです。そうしますと、この人たちが議論するときには、「我々の意見こそはパブリック・オピニオン」といった考え方で行っていたことになります。

このハーバマスの議論に対し、池上英子は、著書『美と礼節の絆——日本における交際文化の政治的起源』のなかで、彼の論ずるパブリック圏は非西洋のコンテクストには適応できないし、また西洋史だけに限ってもその妥当性に数々の疑問が提出されている、と言っています。また、彼女は「パブリック・スフィア」の訳語に、「公共圏」ではなく「パブリック圏」を一貫して使っています。「公共」という言葉ではパブリックと呼ばれる場がひとつしかないように捉えられ、またハーバマス自身もそのように論じてしまっていることが問題だとしたからです。ハーバマスの論理では、ブルジョワという、社会の中でもある特定のグループが「我こそは公共」と言うのをそのまま受け入れてしまっていることになる、と池上は批判しているのです。池上は、パブリック圏というのは無数に存在するものであり、異なる社会的・認知的ネットワークが接触しあい、交差しあう領域であ

るとしています。また、パブリック圏というのは必ずしも合理的・批判的議論を伴う必要はなく、たとえば芸能とか文化とかの美を堪能し、それに留まるという集まりもありうると言っています。池上の議論に沿って、私も今日の身近な例を考えてみますと、たしかに、ブルジョワの男性たちのように持続的に集まって議論を続けるようなものだけでなく、インターネットの掲示板や散歩のときの立ち話のように、合理的な議論にはならないかもしれず、参入者たちがコミュニケーション活動のもたらす結果に重い責任を持たない、その場限りの交流というものがいろいろと思いつきます。

2. パブリック圏としての「座の芸能」と茶道

池上のハーバマス批判の背景には、こういった条件を満たすパブリック圏として、連歌や茶の湯といった中世以降の日本の「座の芸能」を論じたい、ということがあるようです。座の芸能は応仁の乱以降の、戦乱と身分関係の混乱が続く世の中で生まれました。それは、人々がさまざまな形態の水平的結社を組んで自衛しよう、という政治的な欲求が強くなっていったときでした。そこに、「封建的秩序の外側に別世界リアリティを創造する芸術の力が組み合わさった」と池上は分析しています。

座の芸能にはまず、「隠れ家的パブリック圏」だという特徴があります。つまり、さまざまな社会的背景の個人が自発的に同席するもの、既成の社会秩序から離れたところに設定されるものです。また、座の芸能のパブリック圏は「美のパブリック圏」でもあります。純粹に耽美的で、非政治的な美を求める場であったのです。ここには、「芸」とは「座」における相互作用の中から生まれるもの、逆に言えば、「座」とは「芸」を即興的に生み出す場である、という発想があります。池上は、その証拠として、連歌の中には政治的な批判とか攻撃性を示す歌はほとんどないと論じています。私が思うに茶道も、少なくとも表向きは、季節感を楽しむ、亡くなった方を悼むといった目的のために行われます。

さて徳川時代の茶道ですが、背景として、まず士農工商という明確な身分制度が幕府によって確立されました。しかし、世は天下泰平、武士は芸能に熱を入れるようになります。一方で、農工商の人たちも経済的に潤い、芸能をやる余裕が出てきます。そうすると、武士も、他の被支配層である平民も、たとえ同席はしなくても同じものを楽しめたのです。とくに茶道はその特徴があったと思います。茶道では、17世紀後半くらいから、千利休の子孫の流派である三千家が人気となります。彼らは大名に茶道師範をやるかたわら、押しかけてきたリッチな町人や農民にお茶を教えめました。そしてあまりに弟子が殺到した徳川の時期、家元制度を確立したのです。こうなりますと、同じ家元の下ではみな擬似家族という扱いになります。免状を戴いた人は、お家元の名前からひと文字と、自分の名前の文字のひとつとを結びつけて「茶名」を持ちます。すると、身分が何であろうと、同じ家元から名前をもらった家元の子供みたいになって、弟子同士が兄弟のようになるのです。これにより浮世のアイデンティティや身分からの一時的開放がしやすくなったのです。

明治維新から第二次世界大戦終戦までの間には、茶道修練者の中心が男性から女性に移りました。明治維新で士農工商が廃止されると、家元は、大名への茶道師範の職、つまり武士というパトロンを失って経済的に困窮します。それで新しいマーケットとして、女性グループに活路を見出したのです。やがて女性が免状を取って、女性が女性に教えるというパターンが確立しました。けれどもこの時期の女性はむしろ、家庭の中、ドメスティックなスフィアで、お茶で培った技術や作法を生かすことが求められていたようです。いつから女性が、お茶を通した他者との交流をしようと外に出始めたのか、それは、私は主に第二次世界大戦後ではないかと思っています。

3. 現代の茶道

十年弱前、私は五つの茶道グループを対象に、参与観察とインタビューという形で、フィールドワークを行いました。出会った方たちの過半数は四十代後半以降、主に五十代・六十代の方で、ほとんどが主婦でいらっしゃいました。1960年代くらいにはお嫁入り前の年頃で、フィールドワークの時点では子育てが終わっていた方々です。調査を進めるうちに、江戸時代の農工商の人たちと、戦後から高度経済成長期にかけて家庭を作った女性という社会グループの立場が、非常に似ていると気がつきました。私が最初に発見したのかと思ったのですが、残念ながら先駆者がいて、西山松之助が著書『家元の研究』ですでに主張していました。

日本では、戦後になって女性が自らの自主性において行動しうる自由がはじめて与えられたとされていますが、社会学者の落合恵美子は、その時代の女性の生き方は逆に画一化され、女性は社会進出どころか、家庭に入るようになった、と言っています。男性のサラリーマン化と表裏一体に女性が主婦化した、または主婦となることが規範化した、というのが落合氏の議論です。これはちょうど江戸時代の民衆が、お金と時間を得たにもかかわらず、身分に縛られ自由は与えられなかったというのと似ています。彼らが、その不満を遊芸の世界に奔（はし）ることによって補償しえたのと、戦後の女性が芸事に走るということは非常に近い状況であると、西山は言ったのです。また西山は、「お茶やお花などの伝統的遊芸の世界では、一般社会の高級人種とみなされる有名人や富豪、インテリが集合し、主婦でもそれらの人々との交流が可能である」とも言っています。私自身は、そここのところの西山の議論には疑問があります。すべての女性の茶道修練者がそういった人に遭遇したり交流したりする機会はないのではないかと考えています。

それでは、彼女たちはどのような、そしてどのようにパブリック圏を作っていくのでしょうか。私は三つのステップがあるのではないかと思います。第一のステップは、「社中」すなわち「先生ひとりと弟子複数名の単位」で行われるお稽古で、これは似た者同士に出会う場です。ここはパブリックというよりセミプライベート空間という感じです。次のステップでは、社中で仲良くなった人とお茶会を催したり、人の催しているお茶会に出向いたりするようになります。すると不特定多数の茶道修練者に出会い、その場限りの交流を楽しむことになります。このお茶は夏らしい風情ですね、といった話をするのです。最後のステップでは、たとえば地域の文化祭で、依頼されて社中みなでお茶を点てたり、社中または個人単位で、美術館での道具の勉強会などのイベントに出かけたりするようになります。そうすると寺社の聖職者、市長、工芸家、学芸員など、社会のいろいろな立場・身分の人たちと交流することになる。そして「お茶をやっている方」と呼ばれ、伝統文化の護り手として非常に大事にされるわけです。彼女たちは社会的な地位を、そういう形で得るのです。

4. まとめ

お茶のパブリック圏は、それに携わる人にどのような意義・意味があるのかということですが、その前に、江戸時代の農工商の人たちと戦後の女性たちの共通点を再考しますと、「経済的余裕はあるけれど政治的にトップにはなれない社会集団」だということがあります。こういう人たちも、茶道という、既存の社会秩序がいったん無効となる圏域では、時には、自分よりも社会の地位的には優位な他者との交流ができるのです。特に戦後の女性の場合は、伝統的文化の護り手として、社会からリスペクトもされています。

このようなプロセスには、エンパワーメントとしての意義があるのではないのでしょうか。ただし、ここでいうエンパワーメントというのは、政治的もしくは経済的な力を得るという意味合いではな

く、社会の中で価値ある存在として認められる、そこから自分に自信を持って、他人の意のままにされないようになる、ということです。これは個人の内面において、大きな救いです。とはいえ、こういった芸道のパブリック圏というのは、社会の仕組みを根本からは変えようというものではありません。けれども当人たちは、変化の必要を感じていないのではないのでしょうか。彼女たちにはすでに家庭をしっかり支えたという達成感がある。したがって現在の状況そのものを疑問視してしまうと、自らの達成にも意味がなくなってしまう。ですから、むしろ既存の枠組みの中でのエンパワメントを求めているように思います。